

目的

橋本病患者の甲状腺機能は正常から潜在性低下さらに顕性低下へと進行するという一般的通念があるが、実際に検証した報告は筆者が調べ得る限りでは無い。

また血中抗サイログロブリン自己抗体(TgAb)や抗甲状腺ペルオキシダーゼ自己抗体(TPOAb)の推移を追った報告もない。

筆者らは以前当院患者の年齢分布を調べた所、橋本病では30歳と50歳台にピークがあるが以後は減少してゆき、加齢とともに増加していない成績を2年前の本学会で報告した。

そこで今回個々の症例について経過を追跡し、液性免疫の変化を解析した。

方法

平均6ヶ月に1回、血中TgAbとTPOAb(ELISA法、ロシュ社)を測定し、初期値からの%変化率を算出した。

なお期間中に検査試薬の改変などがあれば測定値が変動する恐れがあるため、血清を冷凍保存し約1年後に再測定し採血当時値と比較したところ有意差はなく、測定系は一定していると推測された。

対象患者

橋本病 50例

女性47例、男性3例

年齢：12歳～73歳（平均50.3歳）

2009年～2013年に定期通院した例

対象除外患者：バセドウ病合併

甲状腺腫瘍合併

期間中の妊娠出産

甲状腺自己抗体価変動のまとめ

	TgAb	TPOAb
増加	6 (12%)	12 (24%)
不変	22 (44%)	20 (40%)
減少	22 (44%)	16 (32%)

考察

TgAbとTPOAbのいずれについても増加例が多くないことから、橋本病は自己免疫異常が進行して行かない疾病であることが示唆される。

今回の液性免疫の変動を考慮すると、患者の甲状腺機能とくにホルモン分泌能がどのように変遷するかさらに研究する価値があると思われる。